

『——であるからして、特にもうじき行われるであろう彼岸の大神進は、死後冥界に行ったとしても自分が大神進をする側に回るため、生きている間にしか見ることが出来ない希少なイベントだ。大量の幽霊がかの亡霊嬢、西行寺幽々子に導かれて冥界を横断する様は一見の価値があるので、その時期を見計らって冥界を訪れるのもいいだろう。もつとも、生きたまま冥界を訪ねるのが中々に困難だということが、このイベントの——』

「欠点でもあるのだが。てんてんてん、つと」

内容を口にしながらか走らせていた筆をおいて、組んだ両手をうんと天に伸ばした。記事を書き終えたことによる充足感と解放感が、身体だけでなく心の凝りまで解してくれるのを感じながら、ついだとばかりに首を前後左右へと振ってみる。右に振ったところでこきんと小気味の良い音が鳴って、そこでようやく一息、肩の荷が降りたと安堵あんどの息を吐いた。

薄暗い灯りに照らされた、今書き終えたばかりの記事をざっと眺めて、よしと一つ頷いて立ち上がる。

「よつとつと」

長らく座っていた所為だろうか、痺しびれた足がもつれかけたがそこは鴉天狗の射命丸。すぐに態勢を立て直すと、何事もなかったように壁際へと歩いていった。そしてガラス窓を手前に引

き開けて、次いで外の雨戸を押し開ける。すると瞬く間に今まで頼りない灯り一つで照らされていた室内に陽光が差し込み、その光を真正面から受けた文が眩しそうに手を翳した。見事な快晴。焼けるような夏の午後だった。

雨戸を閉めていたのは何も雨風が激しかったからという訳ではなく、彼女が原稿を仕上げる時の常。外部からの干渉の一切を遮断して最後の仕上げに臨むという、ある種の癖のようなものだ。本人曰く、そちらの方が筆の進みが良くなつてはかどるといふのだが、そのおかげで気付かない間に何日も経過してしまい、結果としてとうに旬の過ぎた記事を号外としてばら撒いたりすることも多々あった。

しかしそんな日数や時間というものは、妖怪として永い時を生きる彼女らにしてみれば些細な事なのだ。それに、彼女らがこうして書き上げている新聞というものも天狗の間で流行っている遊びのようなものであり、そこに速報性や信憑性といったものは必要としない。確かに新聞記者としてそれらしい事をしている天狗もいるし、文もどちらかといえばそちらの部類に入るのだが、結局のところ、根本的には『面白ければそれでいい』という精神で行動しているに過ぎない。

たとえ記事に書かれた内容が、その記者たる自分の手によって引き起こされたような出来事であっても。

たとえ記事に書かれた内容が、全く根も葉も無い嘘八百を並べたような物であっても。

優先されるのは面白さであり、追求するのもまたそこなのだ。

故に、面白ければそれでいい。面白ければ――。

「……って、こんな記事が面白い訳ないじゃないですかア！」

突如窓の外に向かって叫んだかと思うと、文がそのままへなへたと窓枠に倒れ込んだ。ちらりと室内を振り返り、卓袱台ちやぶたいに置かれた記事の版を見て、もう一度窓の外に向き直る。そうして吐かれた溜息は呪詛じゆそのように重く暗く、運悪く目の前を通り過ぎていった妖精が、それに当てられて力無く遙か眼下へと落ちていった。

スランプだった。

とはいえ、文章が書けなくなったという訳ではない。現にこうして記事は書けているし、今し方書き終えた物以外にも、部屋の天井近くを渡された紐には今まで書き上げた原稿が所狭しと吊り下げられている。それらは合わせれば新聞として出すには十分な量。しかし、文は一つとして納得していなかった。

緩やかに吹き込む風が文の頬を撫で、そして吊り下げられた原稿を揺らす。それら一つ一つに大小様々な見出しが付けられているのだが、書いてある内容はといえば、やれブドウ狩りの案内だの、安全で楽しい太陽の畑ヒマワリ鑑賞ツアーだの、地獄温泉巡りだの。

「これじゃあただの観光パンフレットだわ――」
スランプだった。

ネタがない。ネタが見つからない。ネタを作る事も出来ない。

ストックも底を尽き、それでも今年の新聞大会に向けて新聞を出さない訳にはいかず。結果、出来上がったのは夏を彩る幻想郷の観光案内。こんなものを出したところで、精々幻想郷縁起の地域紹介の項目が充実するぐらいなもの。より多くの購読者。より多くの発行部数を得るにはあまりにも頼りない。

もつとも、そう思うのは彼女が天狗であるからであって、幻想郷の、特に人間たちからすれば、むしろそういう物の方が需要はあるのだが。

「こんなはずでは……」

再び漏れ出た呪詛^{じゆそ}めいた呟きに、先程の落下からどうにか復帰してきた妖精がまたも眼下に消えていった。しかし文がそうボヤクのも無理はない。ほんの数週間前まで記事の当てはあったのだ。かの紅魔館の当主こと吸血鬼、レミリア・スカーレットにまつわる話。特に注目はこの数年で霊夢に挑んだ少し変わった将棋の勝負。既に九九九連敗していて、一〇〇〇連敗の大台に乗るかどうかの一大センセーショナル。見事達成した暁には、インタビュウ中にどうやって笑いを堪えればいいのかと、そんな心配までしていたのだ。なのにどういふ訳か、レミリアは一〇〇〇連敗を目前に突如引き籠もってしまった。

思えばそれが切っ掛けだったのかもしれない。

それからというもの、飛べども駆けどもネタは見つからず、いたずらに過ぎていく時間に焦

空が泣いている。

空が鳴いている。

そらがなっている。

なんでこんなことになったのかわからない。

何を間違えたのかもわからない。

ただ思えるのは一つだけで。

それも単純で、シンプルで、わかりやすい後悔の言葉。

血を吐くように、天を、地を呪うように。

叫ぶでもなく、怒鳴るでもなく。

喉の奥から絞り出すように、たった一言を。

「こんなはずじゃなかった……」

天人はそう呟いた。

瓦礫^{がれき}の山と化した紅魔館、轟く雷鳴、そして降りしきる雨のなかで――

現実から忘れ去られ、幻想が集まる場所がある。

幻想郷と名付けられたその地は、現実と幻想の結界に隔てられた箱庭の世界。

日本の元風景とも見れる和風な光景の中に、一つだけ異彩を放つ洋館があった。

真っ赤な薔薇に囲まれたその屋敷を紅魔館という。

住まうのは名にふさわしい貴族にして吸血鬼、レミリア・スカレット。五百年を生き貫禄をまったく感じさせない幼い少女である。

彼女の性格は我侷わがままという一点に集約されていると言っても過言ではない。

太陽の日差しが嫌いだから、という理由で幻想郷を紅い霧で覆った事がある、と言えばその説明には充分だろう。

そのレミリアの最近のブームはといえば、食客を招く事である。彼女自身が気まぐれで気に入った者を招いて食事を振舞うといったもので、もちろんレミリアが料理を作るわけではない。貴族とはそういうものなのだ。

そんなわけで紅魔館には一人の食客が迎えられていた。

比那名居天子。

空色の長い髪の毛と目の彼女はレミリアに誘われるまま紅魔館のテラスにいた。

一族全員が天人に召し上げられた比那名居の中でも、一番若い彼女は天人たる自覚に欠けていると言っても過言ではない。

天人の生活を暇だとぼつさり切つて捨て、地上にちよつかいを出してみたという結果が博麗神社倒壊事件の始まりだったのだ。

結果としてその目論見は失敗に終わったものの、それまであまり無かった下界との交流を持ったことは彼女自身に対してプラスとなったようである。

交友関係が増えた、と素直に彼女は思っている。

しかし当の博麗霊夢としては厄介なヤツが増えた、ぐらいの認識でしかなかった。天人と言えども彼女の前ではすべての評価は無になると考えてよい。

どうでもいいのだ、ようは。

ともあれ、レミリアに招かれた天子は紅魔館のテラスに降り立つと、帽子を取つて優雅に会釈をしてみせる。

「お招きいただきありがとうございます。素晴らしいお茶会になることを期待しているわ」

「よく来たわ。ご期待に添えるようにおもてなしさせていただきますわ」

テラスに立たされた日傘の下でレミリアもまた優雅に会釈してみせた。すすめられた椅子に腰をおろすとすぐさま紅茶が差し出された。

「本日は克蘭ベリーをお茶にいられてみました」

レミリアの傍らに控えた人間のメイド、十六夜咲夜がにっこりと笑って説明していく。

「やや甘めな味と香りなので、英国風にスコーンと一緒に召し上がりください。スコーンのトッピングも各種用意させて頂いておりますわ」

十六夜咲夜の時間を操る程度の能力は天子も把握している。しかしながらなんの準備も用意されていないところからいきなり出てくるような様は、まるで手品のように思えた。

「それにしても、吸血鬼がこんな日当たりのいい場所にいていいのかしら……？ うわつなにこれ美味しいし！」

「私は鍛えているからね、日傘ぐらいがあればこの程度は平気なのよ」

咲夜の淹れた紅茶に舌鼓を打つ天子。

くるくると表情を変える彼女を見ながら、レミリアは目を細める。

「さて、今日呼んだのは他でもない……聞きたいことがあるのよ」

「えっ……ああうんなるほど、そのために私は呼ばれたのね」

キョトンとした表情にまた笑みが浮かんでしまう。

それを何とかこらえながら、レミリアは真剣な表情を作った。

水面に映る月——そんなものを求めてどうなるというのか。

それは所詮、虚像で、虚構で、偽物で、

価値はなく、意味もなく、実体すらも、ない。

それでもそれを求めるといふのか。

それはなんと愚かな行為だろうか。

地位も、名誉も、栄光も、

死んでしまえば、失ってしまえば、後には何も残らないというのに。

だから私は求めない。

そんなもの生きる上では邪魔でしかない。

流れるように、流されるように、波間を揺蕩たゆたいながら。

意志を殺し、我欲を捨て、与えられた仕事を機械のようになしながら。

それが正しいことだと思っていた。

それが正しいことだと信じていた。

虚飾など無駄で、

虚構など無意味だ。

そんなものを求めるのは酷く愚かで、滑稽こっけいで。

ましてやそんなものに縛られるのは——悲しいほどに哀れだ。

だから『彼女』を初めて見た時、
酷く愚かで、滑稽こっけいで、そして哀れだと思い、
だからこそ……私は手を伸ばしたのだろう。

哀れな幼子に、溺れて喘ぐ少女に、己の手を差し伸べたのだろう。
それはただの同情。

条件反射のような、良識に従っただけの自動的な行為。

そこに意味はなく、意義はなく、脈絡すらも、なく。

だからきつと。

もしかすると、ちよつと。

それは復讐——だったのかもしれない。

私の、私による、私のための道具として。

彼女の意志と私の思惑が、たまたま合致しただけに過ぎないのかもしれない。
だとすれば、一番愚かなのは誰なのか。

そして一番哀れだったのは——

「——以上が龍宮からのお言葉です。此処におわす方々ならば、紛うことなく、惑うことなく、しかとその意を汲んでくださることでしょう。宜しいですか？」

いつものように一方的に告げ、私はゆっくりと周囲を見回した。

しかし座敷に居並ぶ面々は頭を擦り付けるように平伏したまま、誰一人として顔を上げようとしなない。高貴な衣に身を包んだ、いずれも名のある天人たちであろうに、その姿は卑屈に過ぎた。龍に成れなかつた、成り損ないに過ぎない私に、名だたる天人たちが目を合わせることもできず平伏している。その姿は滑稽ですらあつた。

——舌でも出してやろうか。

一瞬だけそんな想いが湧いてきたが、軽く息を吐いて奥底に仕舞い込む。空気の読める女を自認しているこの私——永江衣玖に、場の空気を乱す真似など出来るはずもない。

「では、これにて失礼させて頂きます」

私がそう言つて踵を返すと天人たちはより深く頭を下げ（それ以上下げたら、頭が床にめり込むんじゃないだろうか？）その合間を縫うように歩を進める。横目でちらりと周囲を伺うが、誰も顔を上げず、身動き一つしない。息遣いすらも聞こえない。

まるで蛾人形のように。

まるで死に絶えたように。

私は気付かれないように軽く溜息を吐くと、そのまま振り返ることなく座敷を後にした。

S

「永江様、お待ちを！」

座敷を抜けて、板張りの廊下を進みながら、嗚呼、今日も月が綺麗よねえ。だけど雲の上ではいっただって綺麗な月しか見えないわけで、それもまた風流に欠けることだなあ——なんて乙女らしくも可愛げのない感慨に耽ふけっていると、後ろからふいに声を掛けられた。

「……何か？」

掛けられた声は馴染みのもので、振り向く前から察しは付いていたけれど。

私は不機嫌さを紛らわすように（ようになんて、なんて控えめな表現だろう。比喩ひよではなくただの事実であるというのに）敢えて無表情の仮面を被り、ゆっくりと振り返った。

そこにあつたのは予想通りの顔。

座敷に並ぶ天人たちの中でも一際豪奢で華美な装いに身を包んだ（それでいて誰よりも貧相な）中年の男。にたにたと卑屈な笑いを貼り付けたその顔は、口元に貼り付けた髭と相まって泥の中に住む鯰なますのようだった。

その日はさして退屈な日ではなかった。

麗らかな日差し、長閑な天界はいつも通りで、足元に広がるのは累々と転がる半殺しにされた死神達。誰も彼も平等にポッコポコにされたようで、呻きが細波のように辺りから切なく響いている。

「天人が天人足るはまず死神如きに遅れを取らぬ故。それを知って尚向かつてくるのは良い根性で、感動的ね。……だけど無意味だわ」

緋想の剣を片手に、累々たる中一人しつかと立っている比那名居天子は欠伸交じりに呟いた。今日はたまにある天人の暇潰しの日。いや、普段なら他の天人は暇だなどと思っただけではないのだが、ともかく死神達が大笑して天人達に「お前らの寿命はとつくに過ぎているのだから神妙に死ぬ！」と命の刈り取りにやっってきたのだ。

当然死神の意気も虚しく、彼等の一割にも満たない数の天人らによっていつも通り壊滅の憂き目を見た訳だが。ちなみに積極的に返り討ちに走ったのは天子だけであり、他の天人はたま自分のテリトリーに死神が侵入してきたので戯れに相手をした程度である。

おまけで天人になった程度の天子ですら大地を操るような破格の力を持っているのだ。実力で天人と成った者らの実力がどれ程かは推して知れるだろう。

それに、誰もが「広範囲に対する絶大な威力の何か」程度の事は綽然と出来る為、地上の者等からすれば広大で空き地ばかりに見える天界も、天人にとってはいざと言う時手狭だったり

する。自分の力を振るう際、その都度自分の力で自分の住まいや隣近所等を破壊してしまうのは、いくら天人でも心穏やかとはいかないものがあるう。

「あー暇。本読むのも飽きたし……なんかないかなあ」

そしてたつた今から今日は退屈な日になった。

ついさつきまで大変楽しそうに死神をフルボッコにしていた天子なのだが、それが終わるなりこの発言。温室育ちで自分勝手な有頂天娘なので仕方無いは仕方無いが。

「……………死ねば助かるのに」

天子の足元で程良く死にかけている小町がそんな事を言ったが、生憎それは誰の耳にも届かなかった。

敗残者達は放っておけば各々勝手に帰って行くから放っておくとして、そうだと天子は妙案を思い付いた顔で天界のある一角へと向かう。珍しくも天界で大騒ぎがあったのだ。あれならそれを肴さかなに酒を飲むくらいはしても良いだろうし、してない筈はずがない。

そんな期待を胸に、いつぞややってきた凶々しい小鬼の宴会場に天子は訪れる。

「あら？」

だが天子の期待は虚むなしく空振り、そこには誰もおらず、書置きらしきものが残されているだけだ。

なんだろうとそれを拾い上げ、一瞥いちべつする。内容的にはごく短く、読むまでもなく見ただけで

把握する事は容易たやすかった。

『飽いたから返すわ 伊吹』

これだけである。

勝手に来て、勝手に場所とって、勝手に騒いで、色々やらかして、勝手に帰って行った訳だ。「……何の為に天界での仮居留を認めてやったと思ってるのよ!？」

書置きにぎを握り潰し、思いきり雲に叩きつける。無論向こうとしては認められた覚えもなく、良さそうな場所があるから居付いただけで、飽きたから返す事に何の不思議も存在しない。

だが天子からすれば恰好の暇潰しという本音があった為に、彼女としては怒りの一つや二つや三つや四つ湧いて当然だ。

「どうしてくれよう……!」

ぎぎ、と歯軋りするや、さっと身を翻ひるがえし走り出す。

こう言う場合何をするかと言えば、意趣いしゆば晴らしと相場が決まっている。とはいえ、表情がやけに楽しげなのは暇で無くなったからだろう。

「ぐららあがあ！」

晴れ渡る青空の下、守矢の境内に響くのは謎の奇声。

「……何なんですか」

奇声に誘われて出てきた東風谷早苗は、腰に手をやって仁王立ちをしている天子を見て心底呆れた目を向ける。てつきり何か事が起きたのかと、弾幕ごっこをやる気満々わくわくして出てきた所に天子の笑顔なので、氣勢を削がれるのは仕方がない。

「ぐららあがあ？」

疑問符もろとも首を傾げる天子である。

「……………」

早苗からしたらそれはもう訳が分からない。

これはもう挑発と断じて戦闘開始！ で良いんだろうか……と早苗が思い始めた辺りであろう天子が人間の言葉を話します。

「外から来た割にノリ悪いなあ」

「どう答えていいか分かりませんし……また桃の差し入れにでも来て下さったんですか？」

「全然」

「……では、何をしに？」